黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.93 (September 30, 2022)

第93号　2022年9月30日

例会発表要旨

4月例会　2022年4月23日　オンライン開催（Zoom）

① *Jazz* における癒しと回復

河野　世莉奈（福岡大学）

トニ・モリスンの作品には、子どものころに経験した深い抑圧をトラウマ化し、大人になっても苦しみ続ける人物が多く登場する。とりわけ、母親との不安定な関係性が与える影響は大きく、彼らはその記憶や孤独感に苛まれながら、自己の再構築のために闘うことを強いられる。本発表で扱った第 6 作 *Jazz* (1992)においては、ほとんどの登場人物にその傾向がみられると言っていいだろう。ジョー・トレイスは赤ん坊のときに母親に拒絶された過去を持ち、彼の妻ヴァイオレットも母親の自殺の記憶から逃れられずにいる。ジョーと情事にふけるドーカスもまた、暴動で両親を殺された凄惨な過去を持つ少女であり、彼女を引き取り育てた伯母のアリスも両親から受けてきた圧力のせいでドーカスにうまく愛情を注ぐことができない。彼らがそれぞれ抱える過去は、ときに彼らの自己疎外感を高め、ときに自己からの逃避を促している。

本発表では、はじめにジョーと彼の妻ヴァイオレットが持つそれぞれの母親の記憶を概観し、ヴァイオレットに 3 度の流産の経験があることを確認した。彼らはドーカスの死をきっかけに自分たちの中に居残っていた問題と向き合いはじめ、彼女を代理の母/娘とみなすことで、自己を癒そうとしている点を指摘した。また彼らの変化のプロセスが、彼らが住んでいる部屋の家具やベッドのキルト、そして衣服の描写と呼応して描きこまれていることを説明した。

続いて、ドーカスに焦点を当て、彼女と衣服の描写との関係性を概観した。ドーカスがドレスを着飾り、外見を重視していた点、自己の確立を達成しようとするときに死を迎える点では第 3 作 *Song of Solomon* (1977)におけるヘイガーとも共通する点があることにも言及した。

② 『リア王』とモリスン『スーラ』－無、喪失、予言－

福島 昇（日本大学・非）

道化の予言を模倣したスーラの弁証法の形式である言葉遊びは黒人英語の口承伝統に根ざしている。「言葉遊びは話し手が誰かのことを貶め、針を刺し、語る（批判する）儀式化された言語芸術であり、二重の意味や皮肉に依存し、予期せぬことを利用し、素早い言葉の驚きやユーモアを用いている」。『リア王』と『スーラ』の中で、真実と狂気、善と悪、喜びと悲しみ、醜悪と美、悲惨と崇高は絶対相容れない二項が対立をしている訳ではない。二項が対立しているならば、どちらを拒否しどちらを受容すればよいかその判断は容易であるからだ。

地位と領土を失い、狂気と化し、コーディーリアを失ったリアは、すべてを失い、狂気に陥り、全国自殺記念日を創設し、スーラを失ったシャドラックを想起させる。また、のけ者の立場から、集団的な偽善を見抜くスーラは道化の鋭い目を想起させる。対立するものの中間で堪え忍び、判断を保留することは「狂気」の世界がやがて「真実」の世界に変り、見えない世界が見える世界に変り、ボトムの人たちの絶望は希望に変ることである。社会的区別が消え、両極性が解体され、愛が無条件に存在する時代を空想するスーラの「あり得ない弁証法」は、彼女を非難する現代社会の誤った価値観のみならず「アメリカの性に対する清教徒的な見方と人種的偏見」にも向けられている。このように、『スーラ』は『リア王』の主題を受容したものである。「何もない」から「すべて」が生じ、「狂気」を通して「真実」が見え、愛が無条件に存在するのが『リア王』と『スーラ』である。

③ 小倉黒人米兵集団脱走事件

木内 徹（元日本大学）

アメリカの第 24 歩兵連隊（黒人部隊）は 1947 年 2 月から 1950 年 7 月までキャンプ岐阜（各務原市）に駐留した。軍隊内の差別廃止を命じるトルーマン大統領令（1948 年 7 月 30 日発令）もアメリカ軍の差別はなくせなかった。基地周辺は歓楽街ができ、「岐阜の上海」と呼ばれ、その一方で治安が悪化し、性病、麻薬が蔓延した。

しかし 1949 年になって東西冷戦の緊張が高まり、1950 年 6 月 25 日、ついに朝鮮戦争が勃発し、7 月 10 日、連隊は急遽朝鮮戦争に派遣されることになり、キャンプ岐阜を慌ただしく出発し、福岡県小倉市（現在は北九州市小倉北区）のキャンプ城野に到着する。おりしも小倉祇園太鼓が復活し太鼓の音が響き渡っていた。事件をもとにした松本清張の「黒地の絵」も太鼓の音で黒人兵が動揺したという。アメリカ劇作家ユージン・オニールの戯曲「ジョーンズ皇帝」の中にも、太鼓の音で黒人ジョーンズ皇帝が狂いだす場面がある。朝鮮戦争を背景に書かれたトニ・モリスンの『ホーム』も過酷な戦争であると書いている。

キャンプ城野周辺で、1950 年 7 月 11 日から 12 日、数百人が基地から脱走し、略奪、暴行、強姦を働き、二個中隊約 2000 名が出動して鎮圧した。1951 年 4 月に極東軍の司令官となったマシュー・リッジウェイはこれを見て、就任から 1 ヵ月で、第 24 歩兵連隊を白人部隊に編入させ軍隊内を人種統合することを決定する。これがその後の公民権運動の成功につながる。小倉黒人米兵集団脱走事件は人種統合の原点であるということになるのである。

会員からの投稿

沖縄の探究をはじめて　―戦後日本文学の黒人表象と基地

西田　桐子（和光大学）

「漠さん」の愛称で親しまれた沖縄を代表する詩人、山之口漠は「島での話」という詩を書いた。次のような詩である。

来たぞ　くろいのが
とそう云えば
女たちはもちろんのこと
こども達までがあわてふためいて
一目散に逃げたものだと云う
それでそれとすぐにわかるような
いかにもくろい男の子なのだが
くろいのが来たぞと云えば
その子までもあわてて
みんなといっしょに
一目散だと云うのだ

（山之口漠『山之口漠全集　第一巻　全詩集』思潮社、1975 年より引用）

山之口が 1958 年に 34 年ぶりに沖縄の地を踏んで書いた詩である。22 歳から東京で暮らした山之口だが、沖縄の人間であるというアイデンティティを手放すことはなかった。

「漠さん」らしいユーモアをまといつつも描かれるのは、米国統治下の沖縄における抑圧と混乱、そして暴力の気配である。黒人兵が「くろいの」と表現され、「それとすぐにわかるような／いかにもくろい男の子」として黒人と沖縄の女性とのあいだに生まれた「黒人混血児」が登場する。父であるかもしれない黒人兵を恐れる「くろい男の子」の存在をアイロニカルに描くことを通して、繰り返される「くろい」という言葉に象徴されるアメリカによる占領の闇と恐怖が記される。

この詩からは、沖縄文学の人種表象研究の難しさが浮かび上がるだろう。黒人米兵が来ると「女たちはもちろんのこと」逃げるというのは明らかに性暴力を想起させる。山之口の詩人としての意図はひとまず置いたとしても、アフリカ系アメリカ人男性と強姦を巡るステレオタイプに照らせば、差別的な表現であることは言うまでもない。一方で、黒人兵を含む米兵が、沖縄住民に対して、性暴力や殺人を含むさまざまな暴力を行使してきたことも事実である。しかも、その多くが不均衡な日米関係により適切な法の裁きを受けず、さらに多くは事件化すらされてこなかった。

もう一歩踏み込めば、私という、いわば本土の人間が、沖縄について言葉を紡ぐことの難しさが厳然と存在する。端的にいえば、日本の主権回復後も 20 年にもわたり占領状態が続いたこと、現在においても在日米軍基地の七割以上が沖縄に集中していることについての責任の問題である。日本国籍を有する私が、日本のパスポートに保証されて世界の多くの国を訪れることができ、（今のところ）息子が徴兵されることもなく切迫した身の危険もない暮らし

を送ることができるのは、沖縄の犠牲のおかげではないのか。1947 年に「日本国と日本国民統合の象徴」となった直後の昭和天皇が沖縄の軍事占領の継続を望んだということの延長線上に、私たちの「平和」があるのではないか。沖縄に向き合おうとすると、自身の「日本人」としての責任に向き合わざるを得ない。

では、「獏さん」の詩の舞台であった 1950 年代から、事態は良い方向に進んでいるのだろうか。例えば、1995 年の少女暴行事件は、復帰後の沖縄にも差別と暴力の鎖が二重三重に絡みついたままであることを露わにし、犠牲を強いられ続けた沖縄の怒りに火をつけた。

それだけではなく、この事件は人種問題とも深く結びついている。小学生女児が三人の米兵に拉致・強姦されたという事件の凄惨さは、日頃から基地問題に苦しんでいた多くの沖縄住民を動かした。「島ぐるみ闘争」の様相を呈した猛抗議によって、異例の早さで容疑者の身柄は日本に引き渡されたのだが、その一方で、アフリカ系アメリカ人の容疑者の家族は、人種問題と結びつけて日本の警察による自白の強制を疑い、黒人団体も動くこととなった。とはいえ、容疑者家族が主張した人種差別への批判は、米軍基地と日米両政府に対して抗議を行っていた沖縄の人々には寝耳に水であり、国会でも「人種差別問題へのすり替え」だという反論がなされている。

おそらくだが、90 年代以降の沖縄文学の黒人表象を分析するのであれば、この事件の影響を考慮に入れる必要があるだろう。そしてどうやら、沖縄の文学における黒人表象を考えるということは、こうしたいくつもの差別と抑圧の経験と歴史が、（多くの場合は不幸な形で）錯綜する現実を直視するという行為の積み重ねであるようなのだ。

2019 年に提出した博士論文「戦後日本文学の〈黒人〉—文学／芸術／政治運動と黒人表象（1945-1961）—」では今後の課題とせざるを得なかったテーマの一つが、沖縄であった。戦後日本文学の黒人表象を問うならば基地についての探究は必須であり、そうなると沖縄を無視することなど不可能である。そのような思いで昨年からはじめた沖縄の探究だが、ほんの入り口に立ったばかりだというのに、すでに途方に暮れかけている。それでも、五年は踏ん張ってみる、とここで宣言してみたい。

報告

会員による出版

和泉真澄・坂下史子・土屋和代・三牧聖子・吉原真理　著、『私たちが声を上げるとき　アメリカを変えた 10 の問い』、集英社、2022 年 6 月、286pp.

神本秀爾・河野世莉奈・宮本聡　編、『ヒューマン・スタディーズ　世界で語る／世界に語る』、集広舎、2022 年 3 月、293pp.

編集後記にかえて

会員の方々の協力により93号も何とか無事に発行できた。前号発行後の半年間、個人的に本当に目まぐるしい日々であった。濃密な日々ゆえ思い出せないのか、それとも単に忙殺されていたのか、それすらわからないほどである。正直、世の中の流れに取り残された感があるのは確かだ。編集作業の最終段階で会員の例会要旨やエッセイを読み返し、ようやく学び直さなければならないと考えていた箇所を再確認できたのは幸いであった。今年は訳あって夏季休暇というほどの休みもなく、すでに秋学期開始目前である。朝晩は過ごしやすい気温になり夏休みとは程遠いが、わずかに残された数日間で集中して様々な遅れを取り戻したい。

（猪熊　慶祐）

＜編集＞　黒人研究学会・編集部
〒839-8502　福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部・神本秀爾研究室気付

＜編集者＞　猪熊　慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsumei.ac.jp
ホーム・ページアドレス
https://kmmtshuji.wixsite.com/jbsa